

「佐賀熱気球世界選手権に参加して」

砂防課 中村 弘樹

熱気球を趣味にしていることから、秋になると“今年も佐賀のバルーンフェスタは行くの？”と聞かれます。そのような、声をかけられ続けて県職員歴と同じ26年になります。（書きながら年を取ってしまった事を実感）仕事の都合で約1週間ある大会の期間すべてに参加することは少なくなりましたが、毎年参加しているような気がします。

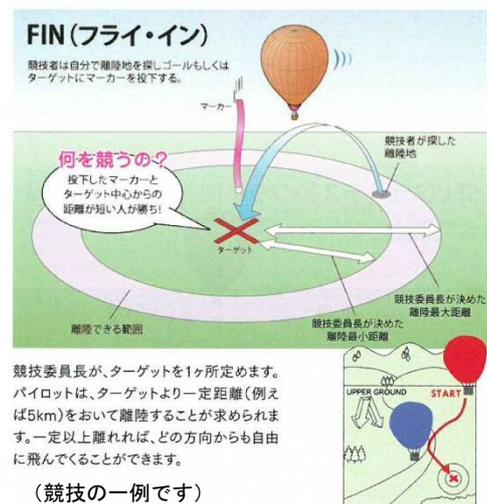
ところで、2016年の佐賀バルーンフェスタは、世界各国の予選を勝ち抜いた強豪が集う“熱気球世界選手権”でした。私達のチームは日本代表選考から漏れていたため、家族を連れてのんびり嘉瀬川河川敷でバルーン見物と思っただけのつもりで、今までに培われた本能が許しません。毎年ですが家族を犠牲？にしても世界選手権に関わりたいと思い、その結果、オブザーバー（競技記録員）として8日間大会に参加することになりました。

（長い期間大会に参加させていただいた、家族や職場の方々には大変感謝です！）

ちなみに、熱気球で何を競うの？とよく聞かれます。簡単に説明するとマーカーといわれるしっぽのついた砂袋のような物を、大会側が設定するゴール地点にいかに近い距離で投げ込むかを競うものです。また、オブザーバーは競技前に割り当てられた競技気球の離着陸時間やマーカー投下時間の確認・ゴールからマーカーまでの距離を計測し、所定シートに記録する仕事を行います。

世界選手権のルールとして、自国のオブザーバーをすることは出来な

いと規定されています。このため、海外チームに同行し競技内容を記録していくこととなります。そのため、コミュニケーションは英語になります。何とかトラブルなく大会を終えることは出来ましたが、何とか身振り手振りで汗だくで意思を伝えようとする自分に対し、海外の人達は国籍や地域を問わず流暢な英語でコミュニケーションを図って楽しんでいます。言葉の壁があっても真に溶け込めない私に対し、ワイワイガヤガヤとしている様子はうらやましい限りでした。上手には言えませんが、2020年の東京オリンピックは自国開催とは



いうものの、リオ以上に金メダルを期待したいのであれば語学力を筋力や精神力と同様に鍛える必要があるのではないかと思います。テニスの錦織選手やヨーロッパで活躍するサッカー選手は凄い人だなと真に感じました。

私も競技パイロットとしてフライトすることがあります。世界トップレベルの選手が、予測のつきにくい佐賀の風を把握し、どのようなパフォーマンスを見せてくれるか関心がありました。実際に競技が始まると、各国の代表選手のほとんどのバルーン（約100機程度）が、離陸地から10kmも離れた目標地点に200m以内に近づくのは当たり前で、



0cmまで近づいているバルーンも数多くありました。さらに、8日間の長い期間の中で集中力が途切れることもなく同様な好成績を重ねていく競技者を見て、飛行技術の高さや忍耐力の強さを感じました。

競技の合間に何人かの選手に、日頃からフライトしていない佐賀で優秀な成績を挙げることが出来るのか？尋ねてみました。返事は、“周りの気球がどのような高さでどの方向に飛んでいるのかを見る”、“競技気球を追跡している地上班から地上や上空の気球の情報、気球内に搭載しているパソコンからの移動情報等（古典的な乗り物と思われがちですが、上空でGPSと連携したパソコンを用いて自分の飛行軌跡や予測を行いながら飛行するのは気球界では一般的）を得ている”との返事でした。内容は、自分が行っていることと全く同じです。結局はパイロットの資質の違いによるものではないかと感じました。

具体的に資質の違いとは、全体の気球を把握する集約力、ここぞというときの瞬時の判断力と行動力の差ではないかと感じました。それで、差を補うための手段としては場数を多く踏むことと思いました。

（しかし、時間と環境、それに伴うお金が無い自分には世界レベルに追いつくなんてほど遠いです）

その他にも農耕民族と狩猟民族との差、いわゆるDNAの違いとも思ったりしました。（考えすぎ！）

（おわりに）

ちょっと、本文の内容が専門的な内容になってしまったのではないかと心配しています。そこで、海外の方と一緒に食事をした時の出来事を2つ紹介します。一つは箸の使い方が上手な人が多かったことです。なぜ上手か尋ねると、“箸を使って食べる機会が多くなっているからみんな上手なのかな”と言っていました。また、高価な日本食は遠慮がちで価格の安い庶民的なお店を多く利用していると言っていた人も少なくはありませんでした。もう一つは、日本のカレーは美味しいとのこと。何故か昼食に提供されたお弁当大手HM社のカレーも大評判でした。B級グルメブームは世界レベル???